

児童一人ひとりに居心地のよさを感じさせる学級経営支援の実践的研究

—学級担任へのコンサルテーションと 社会的能力を育成する学習プログラムの導入を通して—

A Practical Research on Classroom Management Support Toward Sense of Belonging
— Introduction of a Learning Program to Develop Social Competence and
Consultation to Homeroom Teachers —

江 頭 雄一郎

Yuichiro EGASHIRA

高 松 勝 也

Katsuya TAKAMATSU

(福岡教育大学大学院教育学研究科 (福岡教育大学教職実践講座)
教職実践専攻生徒指導・
教育相談リーダーコース/
春日市立春日北小学校)

(平成26年9月30日受理)

要 約

本研究では、児童が居心地のよさを感じる学級経営を進めることができるようにするために、4年生以上の7つの学級の担任(7名)に対する支援を行った。その内容は、児童の学習意欲を向上させるためのコンサルテーションと、児童の社会的能力を育成するためのソーシャルスキルトレーニングを取り入れた学級活動の授業である。その結果、友人関係(ASSESSの向社会的スキル, 友人サポート, 非侵害の関係)の自己評定下位群(偏差値50未満)において、全ての学級が有意に上昇した。今後は、全学級への展開と、ASSESSの自己評定上位群(偏差値50以上)への支援の在り方が求められる。また、家庭や地域の教育力を高め、学校外の場所においても多くの肯定的な言葉をかけてもらうことで、児童の自尊感情も向上させることができるようにするために、各家庭・地域への理解と協力を求める手立てを行い、その検証を行う。

キーワード: 居心地のよさ, 自尊感情, 学習意欲, 教師との関係, 友人関係

I 問題と目的

生徒指導提要(2010)や澁澤(2012)は、最近の都市化や少子化、情報化等が進展する中で、社会全体で様々な課題が生じ、規範意識や倫理観の低下によると思われる児童・生徒の問題行動が多発するなど、学校教育の状況はますます深刻になると指摘している。

また、このような状況の中で、人間関係が希薄になり、他者に対して関心を持てなかったり、自己肯定感が低下し、大きな不安や悩み、自信のなさを抱えたりしている児童・生徒も増えていることを、教育力向上福岡県民会議の「福岡の教育ビジョン」(2008)は指摘している。

さらに、福岡県教育委員会(2012)の「平成23年度公立小・中学校の生徒指導上の諸問題の現状について」によると、「いじめ」の認知校の割合や「不登校」の児童数が増加傾向にあることが示されており、今後、児童・生徒の規範意識を高めたり、適切な対人関係スキルを身に付けたりなどの心の教育を充実させていく必要性が明らかになっている。

それらの課題解決に大きな役割を担うのが学校教育である。そこで、学校教育の中で、児童・生徒が仲間と力を合わせて課題を解決させたり、自己を成長させたりすることを通して、学校及び学級への居心地のよさを感じることができる学級経営を進めていくことが喫緊の課題となっているのである。

しかし、学校においては、教職員の年齢構成の大幅な変化における課題も指摘されている。福岡県教育委員会(2012)の教育調査報告書の人事給与統計調査内にある福岡県教職員年齢別人員構成の推移によると、この数年間で団塊の世代の教職員の大量退職に伴い、新規採用者数も増加傾向にあると明示している。そうになると、経験豊かなベテランの教師からの適切なアドバイスを受けることができず、学校教育の基盤となる学級経営で悩む教師が増えてくることが予想される。

福岡県教育委員会(2013)は、学級経営を「学校における児童、生徒の基本的な活動単位である学級を、教育的な目的に即して組織化し、教育活動を充実させていく教師の仕事。」と述べている。その学級経営を

充実させていくためには、学級という集団を構成する児童一人ひとりに対し、どれだけ学級への適応感を高めさせることができるかが重要となる。

学級への適応感を高めさせる研究はこれまでに多く行われてきており、数多くの研究者がその要因等を明らかにしてきた。大久保・青柳（2004）や岡田（2005）は、これまでの学校への適応感に対する研究をとらえなおし、「友人との関係」「教師との関係」「学業」が学校への適応感に影響を与える重要な要因となると述べ、石田（2009）は、学校適応感尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討する中で、「友人関係」「教師関係」「学習関係」「学校全体」を表す4つの因子を抽出し、相互に強い影響を及ぼし合っている可能性を示唆した。

澤（2004）は、児童の学級適応感に教師の指導行動・態度が及ぼす影響に関する研究を行い、担任教師の「児童への共感的態度」（児童の気持ちを理解し、受け止め、児童一人ひとりに寄り添って、その子に応じたポジティブな働きかけを行う教師の行動・態度）の得点が高いほど、児童の「学校や学習への関心・意欲」の得点が高くなることを示した。

古川・内野（2013）は、居心地のよい学級をつくるためにソーシャルスキルトレーニング（以下 SST）を効果的に取り入れた指導を行うことで、Q-U の結果に良好な変化が見られたことを述べている。

学校・学級への適応には、自尊感情の向上と関連があることも示されている。A.W. ポープら（1992）は、他者から認められるには良好な人間関係が必要であり、そのためには他人とうまく付き合っていけるような対人技能、すなわちコミュニケーションスキルを獲得する必要があると述べている。佐藤（2012）も、良好な人間関係構築に向けたコミュニケーションスキルプログラムに取り組むことで、自尊感情の向上に一定の効果があることを示唆している。

自尊感情については、近藤（2013）は、「自尊感情には基本的自尊感情と社会的自尊感情という、二つの領域があると考えている。基本的自尊感情（Base Self Esteem：BASE）は、他者との比較や、自らの欲求との関係抜きに、自分自身をあるがままに受け入れる感情である。社会的自尊感情（Social Self Esteem：SOSE）は、他者との競争や勝負に勝ったときに高まり、負けたときには下がるような相対的な評価に基づく感情である。」と述べている。

その近藤の考えに基づき、西東京市立芝久保小学校（2012）は、二つの自尊感情を規定する要因を表1のように整理し、校内での研究を進めている。

これらの先行研究から、報告者は、居心地のよさを感じる学級は、児童・生徒の学習意欲と社会的能力が起因しているにとらえる。そこで本研究では、学習意欲・教師との関係・友人関係の向上に視点を当てた教育実践を行うことを通して、児童の自尊感情を高め、

表 1 自尊感情を規定する要因

<p><基本的自尊感情></p> <ul style="list-style-type: none"> ・先生は自分を見てくれている。【信頼感】 ・どんな意見を言っても受け入れてもらえる。【安心感】 ・クラスの一員、芝久保小の一員である。【存在感】 <p><社会的自尊感情></p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の意見や活動、能力が認められる。【自信】 ・頑張って努力してできた、分かった。【達成感】 ・自分の役割に気づき、役立つことができた。【有用感】

居心地のよさを感じることができ学級経営の在り方を探っていく。

II 研究 I

1 研究の目的

授業場面での個に応じた指導を展開するための学級担任へのコンサルテーションを通して、児童の学習意欲と教師との関係の意識の変容の検証を行うことを目的とする。

2 研究の方法

(1) 研究期間：平成 X 年 9 月～平成 X 年 12 月

(2) 研究対象

福岡県内の A 小学校第 4 学年 2 学級 82 名（男子 48 名、女子 34 名）、第 5 学年 2 学級 81 名（男子 44 名、女子 37 名）、第 6 学年 3 学級 73 名（男子 41 名、女子 32 名）。

3 手続き

平成 X 年 6 月と平成 X 年 12 月の学校適応感尺度 ASSESS（栗原・井上：2010）の児童の自己評価の結果をもとに検証する。

ASSESS では、学習意欲や学習方法に対する意識を「学習的適応」因子と命名している。松島・尾崎（2006）は、具体的な学習方法を身につけることで、知識を増やし学力を高め、そのことにより学習意欲が向上することを明らかにしている。折笠・佐藤ら（1983）は、学習方法や学習態度等が学習意欲に起因すると述べている。

以上のことから、「学習意欲」の変容については、ASSESS の「学習的適応」で検証する。

また、「教師との関係」については、教師からの支援や教師との関係についての意識を測定する「教師サポート」で検証する。

4 実践の内容

A 小学校では、毎月 1 回、「授業についてのアンケート」（7 項目 4 件法）を全学級で担任がとり、各学級における授業改善に活かしていくようにしている。

7 月分の結果については、全体の平均と併せ、評定ごとの分布を第一筆者が整理し、各担任に返した（表 2）。それ以降の月については、7 つの項目ごとの全体

表2 5年B組授業についてのアンケート結果
(7月分 n=40)

	質問項目	平均	4	3	2	1
自己決定	1 問題を解決したいと思いましたか。	3.5	24	14	0	2
	2 どのように問題を解決すればよいか、見直しをもつことができましたか。	3.1	15	17	5	3
	3 自分で決めた解決の方法で、問題に取り組むことができましたか。	3.6	27	10	1	1
共感的人間関係	4 友だちとの話し合いで、解決の方法が分かりましたか。	3.2	21	10	6	3
	5 友だちとの話し合いで、友だちの考えのよさに気づくことができましたか。	3.3	16	20	4	0
自己存在感	6 今日の学習は、分かりましたか。	3.6	27	10	1	1
	7 問題の解決に向けて、がんばることができましたか。	3.5	24	14	1	1

表3 5年B組授業についてのアンケート結果
(10月分 n=40)

	質問項目	平均	4	3	2	1
自己決定	1 問題を解決したいと思いましたか。	3.8	32	8	0	0
	2 どのように問題を解決すればよいか、見直しをもつことができましたか。	3.4	18	18	4	0
	3 自分で決めた解決の方法で、問題に取り組むことができましたか。	3.8	30	10	0	0
共感的人間関係	4 友だちとの話し合いで、解決の方法が分かりましたか。	3.6	24	16	0	0
	5 友だちとの話し合いで、友だちの考えのよさに気づくことができましたか。	3.4	20	16	3	1
自己存在感	6 今日の学習は、分かりましたか。	3.6	26	12	2	0
	7 問題の解決に向けて、がんばることができましたか。	3.8	32	8	0	0

○全般的に数値が上がっていますね。学年での取り組み（学年少人数学習：2学級→3コース）の成果です。今後、進度や学校行事などの見直しをもちながら、計画的に継続させていきましょう。

●学習内容・方法の見直しを考えたときに、前時までの掲示資料や学習ノートを指し示し、本時でも使えそうな考えと方法を個別にアドバイスしましょう。

●交流をするときは、「分かりやすい?」「かんたん?」「なるほどと思う?」などの観点を示し、その観点に沿って友だちの発表を聞くように声をかけていきましょう。また、分からない点については、「分からないからもう一度説明して」と言わせ、「聞く」ことを大切にさせていきましょう。

●一般化を図る（練習問題を解く）とき、そばに行って本時の学習内容をつなげてあげる声かけをしてあげましょう。

～子どもが「居心地のよさ」を感じる学級にするために～

○ 今月で後期前半が終わります。そして、今年度の教育活動の4分の3が終わることになります。多くの植物も実りが多いこの後期前半、先生方の学級におかれましても、子どもたち自身がつくり上げた学級の目標に向かって、毎日の活動に一生懸命に取り組んでいることと思います。後期前半の締めくくりにあたり、子どもたちが自分の学級に「居心地のよさ」を感じることができているかどうか、ここでもう一度考えていくことも大切です。そして、後期後半の学級経営の発展期へとつないでいき、全員の子どもが「この学級でよかった」と思えるようにしていきましょう。

「ASSESS」および「授業に関するアンケート」で、数値が低かった子ども（出席番号）を示しています。学級全体の傾向と併せ、「個」にも十分に目を向けて、できる支援を行っていくことが大切です。

1 学習面

○勉強のやり方が分からなかったり、「できない」と不安に思っている子どもたちです。積極的に声をかけたり、個別の支援をしたりして、少しの「できた」「分かった」を積み重ねていくようにしていきましょう。

2 友だち関係

①友だちは、わたしのことを分かってくれていないとか、「いいね」「すごいね」と言ってくれる友だちがいないと感じている子どもたちです。意図的に友だちと関わり合う場、お互いを認め合う場をつくっていきましょう。

②友だちにいやなことをされたり、からかわれたりしていると感じている子どもたちです。「せんせいあのね」アンケートと併せて教育相談をしたり、周りの友だちの言動にも目を配ったりしましょう。

③進んでみんなに挨拶をしたり、友だちを助けたり、友だちの気持ちを考えたりすることが苦手と感じている子どもたちです。自分から進んで友だちに関わるように声をかけたり、そのような姿が見られたときは大いに褒めてあげましょう。

3 教師と関係

○自分のことをもっと分かっていたほしい、気にしてほしい、助けてほしいと思っている子どもたちです。授業場面での個別指導や「いいね」「すごいね」などの肯定的な声かけ、ノートへのコメントなどを大事にしましょう。

図1 学級経営資料

を、教師サポートで教師との関係を見ている。表4では、自己評定上位群（偏差値50以上）の児童についての変容を、表5では自己評定下位群（偏差値50未満）の児童についての変容を示している。

その結果、自己評定上位群の学習的適応で7学級中4学級において平均値が下がっていることが分かる。また、教師サポートにおいては平均値が下がっている学級は2学級に留まってはいるものの、残りの5学級の平均値は微増となっている。

一方、自己評定下位群の学習的適応では7学級中6学級に平均値の上昇が見られ、教師サポートにおいては全ての学級において平均値の上昇が見られることが分かる。各項目の変化を統計的に処理した結果、学習的適応では4年A組と5年A組、教師サポートでは4年A組、5年B組、6年C組の平均値に有意差が見られ（表5）、自己評定下位群における平均値の上昇が明らかになった。

このことは、6月に行ったASSESSの結果や授業に関するアンケートの結果を報告者が分析し、自己評定が低い児童を明確に示したり支援の案を提示したりしたコンサルテーションにより、各学級担任が授業づくりの工夫・改善に努めたり、授業場面での個への関わりを密にしたりした結果であると考えられる。表6の学級担任へのアンケート結果からも、支援の中心が自己評定下位群に向いてしまい、自己評定上位群への支援の不十分さがはっきりと分かった。

の平均と評定ごとの分布と併せ、その児童名と今後の支援案を示し（表3）、各担任へ返した。なお、項目によっては回答していない児童もいたが、各担任へは実数として返した。

その際、学級担任の指導の工夫や努力を認める文面も必ず記載するように努め、その後、支援の案を記載するようにしていった。

そして、学習中の児童の姿を振り返りながら、課題解決に有効に働いたと思われる手立てについて考えたり、今後も継続して学習指導に活かしていく手立てや、さらに学習具を工夫したり、交流の在り方を見直したり、学習形態を工夫したりなどの「個」に応じた指導の改善案について意見を出し合ったりした。

また、12月には、6月に実施したASSESSの学習的適応についての自己評価が低い児童を報告者が学級経営資料（図1）の中に明記して各担任に示すことでより「個」に応じた指導を考えてもらうきっかけとした。

5 結果と考察

ASSESSの学習的適応と教師サポートの変容を示す（表4・表5）。ここでは、学習的適応で学習意欲

表 4 A 小学校の児童自己評定上位群（偏差値 50 以上）の平均値と SD の変容および t 検定の結果

学習的適応					教師サポート				
		6 月	12 月	t 値		6 月	12 月	t 値	
第 4 学年 A 組	(n=23)	65.48 (4.62)	66.35 (10.78)	0.21	(n=23)	65.48 (14.17)	66.39 (18.17)	0.22	
	B 組 (n=23)	58.04 (5.01)	60.96 (9.21)	0.63	(n=23)	58.04 (11.65)	61.04 (13.76)	1.09	
第 5 学年 A 組	(n=21)	61.29 (11.17)	56.14 (12.02)	2.22*	(n=25)	65.12 (12.65)	57.04 (11.32)	2.60*	
	B 組 (n=23)	60.48 (11.23)	57.82 (11.31)	0.83	(n=24)	63.46 (11.79)	65.87 (16.47)	0.81	
第 6 学年 A 組	(n=15)	65.21 (14.87)	64.63 (13.36)	0.14	(n=19)	65.21 (13.92)	65.79 (12.41)	0.24	
	B 組 (n=15)	59.13 (7.98)	58.27 (11.99)	0.25	(n=21)	64.14 (12.30)	65.62 (13.36)	0.48	
	C 組 (n=10)	60.60 (9.02)	67.20 (13.43)	1.61	(n=8)	55.50 (10.54)	54.88 (11.22)	0.10	

* p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .005

表 5 A 小学校の児童自己評定下位群（偏差値 50 未満）の平均値と SD の変容および t 検定の結果

学習的適応					教師サポート				
		6 月	12 月	t 値		6 月	12 月	t 値	
第 4 学年 A 組	(n=18)	41.83 (4.62)	48.39 (13.77)	2.20*	(n=18)	41.83 (4.62)	48.61 (13.76)	2.29*	
	B 組 (n=18)	42.89 (5.32)	48.22 (13.46)	1.60	(n=18)	42.89 (5.32)	48.44 (13.45)	1.68	
第 5 学年 A 組	(n=20)	43.85 (6.17)	48.55 (8.60)	2.37*	(n=16)	43.13 (3.74)	44.25 (5.39)	0.65	
	B 組 (n=17)	42.59 (8.15)	51.59 (7.78)	6.66	(n=16)	44.63 (3.98)	51.25 (10.97)	2.43*	
第 6 学年 A 組	(n=8)	40.00 (5.48)	43.36 (7.54)	0.98	(n=4)	38.25 (6.38)	55.75 (16.51)	1.43	
	B 組 (n=10)	43.10 (6.65)	42.80 (6.78)	0.11	(n=4)	42.00 (3.32)	50.75 (7.50)	1.45	
	C 組 (n=15)	43.60 (6.30)	45.53 (7.29)	0.93	(n=17)	38.59 (6.57)	50.06 (10.22)	5.54***	

* p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .005

また、教師サポートと学習的適応の関係について統計的な処理を行った結果を示した表 7 では、4 年 A 組、6 年 A、6 年 B 組の 3 学級を除く 4 学級で相関係数は $0.2 < r \leq 0.4$ または $0.2 < r \leq 0.7$ となっており、教師サポートと学習的適応には低い正の相関または正の相関が認められた。つまり、学習意欲が低い児童に対して、授業づくりの工夫・改善を図ったり、直接的な支援を密に行うことで、児童の学習意欲を高めることができるとともに、教師との関係もよいものへと高めていけるといった可能性が示されたと言える。

Ⅲ 研究Ⅱ

1 研究の目的

子供たちの対人関係スキルを中心とした社会的能力を育成するために、学級活動の中で SST を取り入れ、友人関係についての意識の変容の検証を行うことを目的とする。

2 研究の方法

(1) 研究期間：平成 X 年 9 月～平成 X 年 12 月

(2) 研究対象

福岡県内の A 小学校第 4 学年 2 学級 82 名（男子 48 名、女子 34 名）、第 5 学年 2 学級 81 名（男子 44 名、女子 37 名）、第 6 学年 3 学級 73 名（男子 41 名、女子 32 名）。

3 手続き

平成 X 年 6 月と平成 X 年 12 月の学校適応感尺度 ASSESS（栗原・井上：2010）の児童の自己評価の結果をもとに検証する。

表 6 学級担任へのアンケートの結果

Q 「授業についてのアンケート」をもとに行ったコンサレーションは、どのような点で有効だと考えますか。
A ・高い数値を見ると自身の励みとなり、やりがいを強くもてた。低い数値を見ると、指導の質なのか担任との関係によるものなのか、深く考えるきっかけとなった点。(30 代男性)
・教師側で推測していたことと、子供が感じていることにギャップがあることが分かった。気になる子への観察や声かけのきっかけとなったり、少人数指導の形態を見直すことができた点。(20 代女性)
・「えっ、この子が？」と思うような子供もいて、新しい発見をすることができた点。(20 代男性)
Q 授業の中で、特にどのような支援に努めていきましたか。
A ・算数の時間に、ヒントカードを使って個別支援の機会を増やした。(30 代男性)
・計算の仕方が分からずに困っている子に対して、個別に支援した。(50 代男性)
・学習意欲が低い子に対して机間指導の際に必ず声をかけたり、努力していることを誉めたりして、達成感を感じさせた。(50 代女性)
・個別の声かけや個別の教材を準備したり、少人数指導やペア・グループ交流を行っている。(20 代女性)

表 7 A 小学校の教師サポートと学習的適応の相関係数

学年	A 組	B 組	C 組
4 年	(n=41) .183	(n=41) .312	
5 年	(n=41) .284	(n=40) .421	
6 年	(n=23) .143	(n=25) -.077	(n=25) .284

ここでは、友人からの支援や友人関係を表す「友人サポート」、否定的な友人関係を表さない「非侵害的關係」、友人に働きかけるスキルを表す「向社会的スキル」の 3 因子で、「友人関係」を見ていくこととした。

表8 学級活動（スキル教育）計画案

	4 年 生	5 年 生	6 年 生
9 月	27 日：じょうずな話の聞き方を学ぼう	19 日：いじめのない学級づくり	18 日：上手な聞き方を学ぼう
10 月	25 日：みんなで協力しよう	11 日：協力する楽しさを知ろう	11 日：マナーを身につけよう
11 月	21 日：友だちのよさを発見しよう	14 日：チームワークを高めよう	24 日：こんなときどうする
12 月	5 日：自分のよさが見つかった	6 日：自分と友だちのちがいを認め合おう	16 日：協力する楽しさを知ろう
			29 日：協力する楽しさを知ろう
			12 日：正しく聞き取ろう

4 実践の内容

A 小学校では、児童理解を深め、個に応じた指導を充実させていく目的で、X 年 6 月に学校適応感尺度 ASSESS（栗原・井上，2010）を行った。その結果を見ると、第 4 学年から第 6 学年までの 7 学級では、友人関係（友人サポート・向社会的スキル・非侵害的關係）は、偏差値 50 をほぼ超えていた。しかし、「個」に目を向けると、友人サポートでは 97 人、向社会的スキルでは 74 人、そして非侵害的關係では 88 人が偏差値 50 未満であることが分かった。（4～6 学年：全 236 人中）

そこで、第 4 学年から第 6 学年までの 3 学年において、よりよい友人関係を構築するスキルを身に付けさせていくために、SST を取り入れた学級活動を 8 月に計画してもらった。その際、第一筆者が各担任から学級・学年の実態を聞き、各月の生活のめあてや学校行事などとの関連を考慮しながら、「社会性を育てるスキル教育」（國分康孝監修・清水井一編集：2007／図書文化）をもとに取り組み案を提示した。その後、取り組み案をもとに各学年で学級活動計画案を作成してもらった（表 8）。

そして、各学年で作成してもらった計画案をもとに 9 月から第一筆者が授業を行い、学級担任は授業を参観するようにした。

授業の展開や資料については前述の資料を活用して授業づくりを行ったが、それに加え、第一筆者は児童一人ずつが授業の感想を出す場や友だちが行った活動の中でよかったところを出し合う場を必ず設定した授業を行った。そのことを通して、身につけさせたいスキルを、児童自身が身につけていきたいスキルとして意識を高めて学習に参加できるとともに、安心感や自信が高まり、基本的及び社会的自尊感情の向上にもつながると考えたからである。

また、各学級には様々なニーズを抱えた児童がいることから、1 時間の見通しを明らかにし、迷うことなく学習参加ができるように、1 時間の流れやロールプレイの仕方などを文字化して提示していくことも行った（図 2）。

さらに、板書は必要最小限の情報にとどめ、行う活動とそこで活用するスキルが一目で分かる、シンプルなものにすることに努めていった（図 3）。

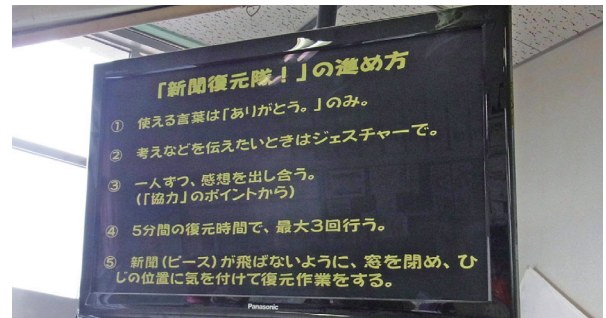


図 2 文字化した「学習の進め方」の例

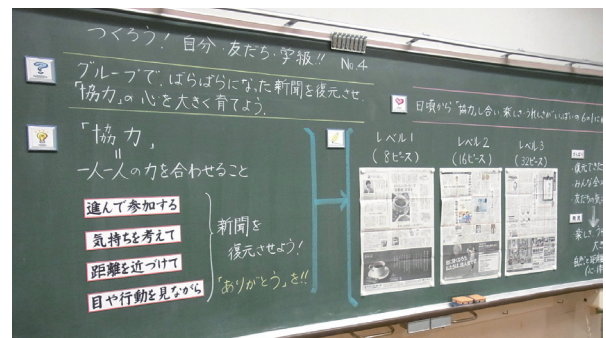


図 3 板書の例

授業後は、そのスキルの定着を図るために第一筆者が作成した「がんばりカード」（図 4）をもとに、1 週間の実践化を図るようにさせた。そして、1 週間の取り組みで、学習したスキルを多く活用することができた児童には、第一筆者が作成した「〇〇名人認定シール」を贈呈していった（図 5）。

また、第一筆者は、授業で学んだスキルを明確にした資料を各教室に掲示し（図 6）、意識化を図るようにしていった。

さらに、12 月には、ASSESS において友人関係に関する因子（友人サポート・向社会的スキル・非侵害的關係）の中で、偏差値 50 未満の結果が示された学級経営資料（図 1）を第一筆者が各担任に渡し、日頃の様子を注意深く観察したり、積極的に声かけをしたりなど、個に応じた指導の充実に役立ててもらうようにした。

5 結果と考察

ASSESS の友人サポート、向社会的スキル・非侵害

「上手な聞き方」がんばりカード

6年 1組 ()

○ 上手な聞き方の3つのポイントに気をつけて、先生や友だち、家の人の話を聞くことをがんばっていきましょう。

★ポイント①「体で聞く」

- 相手の方に体に向けて、相手を見る。
- 少し身を乗り出して聞く。

★ポイント②「かわって聞く」

- うなずいたり、相づちを打ったりする。
- 「うんうん」「なるほど」「そうなんだ」。

★ポイント③「深くかわって聞く」

- 質問をしたり、自分の意見を言ったりして聞く。
- 「いいなあ」「そう、すごいね」「かっこいいね」
- 「それで、どう思ったの?」「それからどうしたの?」「へだったんだね」「うれしかったでしょう」。



月・日・曜日	ポイント①	ポイント②	ポイント③	家の人のサイン
9/18 (水)	○	○	○	
9/19 (木)	○	○	○	
9/20 (金)	○	○	○	
9/21 (土)	○	○	○	
9/22 (日)	○	○	○	
9/23 (月)	○	○	○	
9/24 (火)	○	○	○	

図 4 がんばりカード



図 5 名人認定シール



図 6 6年生教室の掲示物

表 9 A 小学校の ASSESS の児童自己評定上位群 (偏差値 50 以上) の平均値と SD の変容および t 検定の結果

	友人サポート			t 値	向社会的スキル			t 値	非侵害的関係			t 値
	6 月	12 月			6 月	12 月			6 月	12 月		
4 学年 A 組 (n=27)	65.52 (13.61)	62.48 (15.12)	0.97	(n=27)	64.00 (11.88)	64.96 (11.66)	0.37	(n=29)	65.97 (12.68)	66.10 (13.31)	0.05	(n=24)
B 組 (n=24)	63.67 (12.64)	61.75 (14.34)	0.74		62.42 (11.34)	66.54 (15.00)	1.34		61.92 (12.54)	64.54 (16.83)	0.81	
5 学年 A 組 (n=17)	66.53 (14.13)	67.59 (14.83)	0.21	(n=28)	63.71 (10.60)	60.11 (11.18)	1.59	(n=32)	64.19 (12.16)	61.88 (14.12)	0.68	(n=24)
B 組 (n=20)	60.35 (11.77)	56.05 (14.78)	1.07		59.88 (5.78)	57.92 (14.44)	0.71		62.12 (11.14)	59.12 (14.93)	0.82	
6 学年 A 組 (n=18)	65.56 (12.84)	69.33 (14.38)	0.85	(n=18)	70.06 (8.03)	66.72 (8.37)	1.30	(n=12)	60.58 (10.52)	66.00 (12.23)	1.39	(n=14)
B 組 (n=15)	66.07 (14.11)	72.07 (13.71)	1.29		61.76 (7.99)	63.71 (9.39)	1.29		62.07 (11.27)	67.21 (13.92)	1.79+	
C 組 (n=15)	60.67 (11.59)	63.60 (16.59)	0.77	(n=17)	59.59 (7.84)	64.76 (10.32)	2.56*	(n=11)	57.82 (13.70)	66.55 (13.47)	1.21	

+ p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .005

表 10 A 小学校の ASSESS の児童自己評定下位群 (偏差値 50 未満) の平均値と SD の変容および t 検定の結果

	友人サポート			t 値	向社会的スキル			t 値	42.73(5.78) 非侵害的関係			t 値
	6 月	12 月			6 月	12 月			6 月	12 月		
4 学年 A 組 (n=14)	41.36 (6.41)	51.79 (8.17)	3.28**	(n=14)	42.86 (5.64)	48.36 (12.53)	1.74+	(n=12)	44.08 (4.50)	47.92 (17.20)	0.78	(n=14)
B 組 (n=14)	42.71 (5.53)	52.14 (10.88)	3.61***		42.71 (5.32)	47.50 (7.14)	2.73*		42.71 (5.79)	51.64 (14.23)	2.42*	
5 学年 A 組 (n=24)	42.04 (4.94)	49.92 (4.44)	2.79**	(n=13)	41.77 (6.82)	48.62 (6.96)	2.71*	(n= 9)	38.67 (3.83)	47.78 (6.27)	4.96***	(n=16)
B 組 (n=20)	39.45 (5.23)	46.60 (6.41)	3.68***		41.63 (6.56)	52.06 (11.58)	2.90***		42.69 (4.93)	58.81 (17.11)	3.71***	
6 学年 A 組 (n=5)	37.40 (6.71)	53.00 (17.42)	1.58	(n=5)	42.00 (7.16)	52.20 (17.08)	1.10	(n=11)	39.82 (6.86)	57.73 (12.19)	4.40***	(n=15)
B 組 (n=10)	40.40 (6.17)	47.20 (8.26)	1.92+		44.00 (4.95)	48.25 (5.76)	1.36		41.45 (5.37)	44.27 (7.01)	1.24	
C 組 (n=10)	41.50 (5.84)	52.90 (11.25)	2.90*	(n=8)	44.50 (4.15)	53.50 (8.17)	3.70**	(n=15)	42.73 (5.78)	54.00 (13.46)	3.04**	

+ p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .005

的關係の変容を示す (表 9・表 10)。表 9 では自己評定上位群 (偏差値 50 以上) の児童についての変容を、表 10 では自己評定下位群 (偏差値 50 未満) の児童についての変容を示している。

その結果、自己評定上位群で、友人サポートは 7 学級中 4 学級、向社会的スキルは 7 学級中 4 学級、そして非侵害的関係は 7 学級中 5 学級で平均値が上昇していることが分かる。

一方、自己評定下位群では、友人サポート、向社会的スキル、非侵害的関係の全ての因子で全ての学級の

平均値が上昇していることが分かる。各項目の事前・事後の得点を t 検定 (対応データ、10%水準) で処理した結果、友人サポートでは 6 年 A 組を除く 6 学級、向社会的スキルでは 6 年 A・B 組を除く 5 学級、そして非侵害的関係では 4 年 A 組と 6 年 B 組を除く 5 学級において、有意な差が見られた。

このことから、ASSESS の結果を分析し、友人関係における学級全体の実態と併せ、「個」の実態を明らかにするとともに、自己評定下位群の子供たちに焦点を当てた SST を取り入れたことの効果が分かる。

表 11 A 小学校の基本的自尊感情と社会的自尊感情の t 検定結果

学年・組	基本的自尊感情			社会的自尊感情		
	6 月	12 月	t 値	6 月	12 月	t 値
4 年 A 組 (n=41)	18.00	18.22	0.86	16.95	17.07	0.57
B 組 (n=41)	17.22	18.20	1.83	16.78	17.05	0.62
5 年 A 組 (n=41)	16.88	17.41	1.15	15.22	15.44	0.64
B 組 (n=40)	16.13	16.88	1.44	14.78	15.18	0.55
6 年 A 組 (n=24)	17.25	17.88	0.73	15.16	15.67	0.70
B 組 (n=25)	17.64	18.16	0.97	16.64	16.68	0.18
C 組 (n=25)	16.28	17.08	2.70	15.44	16.16	1.85+
+ p < .10 * p < .05 ** p < .01 *** p < .005						

表 12 学級担任へのアンケートの結果

Q SST を取り入れた学級活動を、いつもどのように見られていましたか。
A・課題のある（コミュニケーション、対人関係）子供の活動とその周りの子供たちの動きを丁寧に観察していました。その後の、授業や給食・そうじ・休み時間等で、子供同士をつなぐ取り組みも考えていました。（30 代男性）
・それぞれの子供の人間関係や良いところを見つけようと思いつながっていました。また、日頃の学級指導にどのようにつなげていこうかと考えていました。（20 代女性）
・子供の授業に向かう姿勢や、その授業の中で成長する姿がすばしかったです。その後、担任も意識して声をかけるようにしていきました。（20 代男性）
Q 子供たち一人ひとりが居心地のよさを感じる学級にするために、先生が意識して日頃から実践していることを教えてください。
A・第一筆者に掲示していただいた学習の足跡（スキルのポイント）を意識させるようにし、子供たちが自分の姿と学級の目標を重ねて考えていけるようにしている。（50 代女性）
・活躍する場を意図的につくり、帰りの会で友だちの良いところを見つけ合うようにしている。（20 代女性）

授業の中では体験活動を多く取り入れることで多くのスキルを身に付けさせたいと願っていたのだが思ったように体験活動の時間を十分に確保することができなかった。しかし、その分、グループの中で一人ずつ感想を出し合い、それを認め合う場を設定したことや、友だちのよかったところを出し合って、友だちを認め合う場を設けたことにより、「友だちは、自分のことを分かってくれている。」「友だちから、自分のことを認めてもらってよかった。」等の意識が高まったことで、共感的な人間関係や自己存在感が高められた結果でもあると考える。

さらに、授業の中で感じ取った各スキルのよさを、より確かなものへと高めさせるために行った 1 週間のがんばりカードによる実践や、いつでも学んだ各スキルを目にすることができるようにした教室の掲示資料により、児童一人ひとりの行動や意識に変化をもたらすことができた結果でもあると考える。

X + 1 年 1 月に、4 年生以上の各担任 7 名に実施したアンケートの結果（表 12）からは、第一筆者が SST を行うことで、学級担任の児童理解や学級経営

の視点が明らかになったり、自身の実践につなげていったりなど、学級経営を十分に支援することができたことも明らかになった。

IV 総合考察

学習意欲を向上させるコンサルテーションを各担任に対して行ったことと、児童の社会的能力を育成する学習プログラムの導入を行ったことは、児童一人ひとりに居心地のよさを感じさせる学級経営を支援していくために一定の効果があつた。それは、児童の学習意欲を高めるとともに、教師との関係、友人関係もよりよいものへと高めることができたからである。

しかし、SOBA-SET（18 項目 4 件法：最高 24 点、最低 6 点）の各項目の変化を t 検定した結果（表 11）、有意な差は見られなかった。これは、「個」に応じた学習指導の工夫を通して、教師との関係と学習意欲が高まったのは自己評定下位群の少数に留まり、より多くの児童に信頼感や達成感、自信を十分に味わわせることができなかった結果であると考ええる。SST を取り入れた学級活動の実践においても、友人関係に関する項目（友人サポート・向社会的スキル・非侵害の関係）で有意に上昇が見られたのは自己評定下位群に留まり、安心感や存在感、有用感を十分に味わわせることができなかった結果でもあると考える。

また、中村（2012）の研究では、8～9 回の SST の実践により児童の自尊感情の向上が見られている。それと比べると、本研究における各学年の実践は明らかに少ない。従って、本研究の結果は、長期間における継続的な実践により社会的スキルと自尊感情が向上するといった先行研究の結果と一致するものである。

本研究においては、自己評定上位群の学習意欲及び教師との関係の面において、平均値の減少が見られたことや、基本的自尊感情・社会的自尊感情の平均値の変容に有意な差が見られなかったという課題が残った。これは、学習場面において、自己評定下位群に対する支援が多く、自己評定の上位群の児童にも有効に働く支援が不十分であったことを示している。

今後は、「授業についてのアンケート」の結果の示し方や「学級経営資料」の内容を工夫し、自己評定上位群の児童のよさを引き出すコンサルテーションを考えていく必要があると考える。このことで、自己評定上位群の児童も学習意欲が高まると共に、教師との関係もよいものへと高まるのではないかと考える。併せて、SST を取り入れた学級活動を継続して実践していきながら、そのねらいや取り組みの様子の多くを各家庭・地域へも発信していきたい。

家庭や地域の教育力の低下が大きな課題の一つとなっている今日、学校での取り組みをお便りなどで分かりやすく伝えていくことで、それを参考にしながら子育てを行う家庭や地域が増えていくようになると思われる。そうなれば、学校と学校外における児童への

声かけの仕方が共通のものとなることで社会的スキルがさらに身についていくのではないかと考える。

さらに、児童が社会的スキルを身につけたり、適切な行動をとろうとする努力の姿が見られたりしたときには、学校外においても肯定的な声かけが多くなり、より多くの児童の自尊感情を高めることにもつながっていくものと考ええる。

参考及び引用文献

- A.W. ポープ・S.M. ミッキヘイル・W.E. クレイグヘッド・高山巖（監訳） 自尊心の発達と認知行動療法ー子どもの自信・自立・自主性をたかめるー 1992年 岩崎学術出版社
- 江村早紀・大久保智生 小学生における学級適応感の規定因についての検討ー学級の特徴に注目してー日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集（19）2010年 130
- 江村早紀・大久保智生 授業場面における児童と教師のコミュニケーションと児童の授業場面への動機づけおよび学級への適応との関連 香川大学教育実践総合研究 22 2011年 177-183
- 江村早紀・大久保智生 小学校における児童の学級への適応感と学校生活との関連：小学生用学級適応感尺度の作成と学級別の検討 発達心理学研究第23巻第3号 2012年 241-251
- 福岡県教育委員会 教育調査報告書 2012年
- 福岡県教育委員会 平成23年度公立小・中学校の生徒指導の諸問題の現状について 2012年
- 福岡県教育委員会 若い教師のための教育実践の手引き 2013年
- 藤波貴 自己肯定感を高め、どの子どもにも居心地のよい学級をつくるための研究ー特別活動における開発的・予防的教育相談を取り入れた指導を通してー山形県総合教育センター一般留学生研究報告書 2006年
- 古川順次・内野成美 支援を要する児童が居心地のよさを感じる学級づくりの研究 長崎大学教育実践総合センター紀要 2013年
- 石田靖彦 学校適応感尺度の作成と信頼性、妥当性の検討 愛知教育大学教育実践センター紀要 12 2009年 287-292
- 河村茂雄 集団体験と学級経営 岩手大学教育学部付属教育実践研究指導センター研究紀要第9号 1999年 1-8
- 國分康孝監修 清水井一編集 社会性を育てるスキル教育 小学4年生～6年生 2007年 図書文化
- 近藤卓 子どもの自尊感情をどう育てるか 2013年 ほんの森出版
- 栗原慎二・井上弥編著 アセスの使い方・活かし方 2010年 ほんの森出版
- 教育力向上福岡県民会議 福岡の教育ビジョン 2008年
- 松田育子・島崎保 児童の自尊感情と学級適応感との関連に関する研究ー学級づくりにおける教師の働きかけの視点からー 日本教育心理学会総会発表論文集（49）2007年 450
- 松島るみ・尾崎仁美 小学生の学習意欲と学習行動の関連 京都ノートルダム女子大学研究紀要 36 2006年 27-38
- 松下良策・石津憲一郎・下田芳幸 学級適応感を支える要因の検討：自尊感情、非排他性、肯定的フィードバックの観点から 教育実践研究 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 5 2011年 61-68
- 溝部晃・篠原謙太郎・中島智美・平井育子 援助ニーズの高い児童生徒のいる学級への教育相談的にかかわりー授業を通して学級適応感の変化を探るー 川崎市総合教育センター 研究紀要第20号 2007年
- 文部科学省 生徒指導提要 2010年 教育図書
- 中村豊 小学生を対象としたソーシャルスキル教育の効果 関西学院大学教育学論究 4 2012年 59-69
- 西田依子 小学生の自尊感情を育む学級経営のあり方ー自尊感情が低下する中学年を中心にー 岐阜大学教育学部教師教育研究 2012年
- 西東京市立芝久保小学校 自己の価値や役割を自覚し、自己肯定感を高め学習に取り組む児童の育成研究指定校報告書 2012年
- 大久保智生・青柳肇 中高生用学校生活尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 日本福祉教育専門学校研究紀要 12 2004年 9-15
- 岡田涼 友人関係への動機づけ尺度の作成および妥当性・信頼性の検討：自己決定理論の枠組みから 日本パーソナリティ心理学会 パーソナリティ研究第14巻第1号 2005年 1-112
- 折笠仙衛・佐藤晃暢・嶋原弥・小川兼太郎・佐久間益郎・五十嵐昭義 学習意欲を高める心理的治療への理論的アプローチ 福島県教育センター研究紀要第53号第1年次 1983年
- 西条正人 振り返り活動を通して生徒の自尊感情の高揚を目指す特別活動の取組ー「自己受容」「ふれあい・承認」の視点を導入した実践からー 教育実践研究 第23集 2013年 235-240
- 佐藤貴史 小学校高学年における自尊感情を高めるための指導に関する研究ーコミュニケーションスキルプログラムの実践を通してー 青森県総合学校教育センター 研究紀要 2012年
- 澤祐紀恵 児童の学級適応感に教師の指導行動・態度が及ぼす影響に関する研究 石川県教育センター大学院派遣研修報告 2004年
- 澁澤透 子どもの現状と生徒指導の課題 南九州大学人間発達研究第2巻 2012年
- 山本都久・瀬戸広美 学級での居心地のよさを規定する要因 富山大学教育実践総合センター紀要No.1 2000年 51-55